

地質サイトカード

カードNo.		B-④-3	通しNo.	36	作成日	2025/4/30
サイト名		オロチの ひいかわ 斐伊川				
基本情報	エリア	出雲平野・宍道湖・中海低地帯 探訪サイト				
	区分	☒ 地質・地形	☒ 生態	☒ 文化		
	利用価値	☒ 科学	☒ 教育	☒ 観光・ツアー		
	所在地	松江市、出雲市ほか				
	アクセス					
	周辺施設	☐ トイレ ☐ 売店 ☐ 飲食店 ☐ 駐車場(台) ☐ ウォーキングコース ☐ サイクリングコース ☐ 観光施設()				
	看板整備					
留意点					位置情報	b-3
保護・保全	法規制・関連団体等	国土交通省出雲河川事務所				
	保全メモ					
サイトの解説	みどころ	出雲平野や宍道湖・中海の形成に重要な役割を果たしている河川。神話伝説も多い。 斐伊川は船通山に源を発し、北に流れて出雲平野を下り、宍道湖にそそいでいる。さらに宍道湖・大橋川・中海を経て境水道から日本海の美保湾へと続く1級河川である。流長153km、流域面積2070km ² 、江川、高梁川に次いで中国地方で3位、全国では29位の大河川である。しかし、狭義の斐伊川は宍道湖へそそぐ地点までで、その流長は75km、流域面積は920km ² と全体の半分を占めるにすぎず、宍道湖・中海に注ぐ他の中小河川によってこのように大きな流域となっている。 斐伊川は全国有数の天井川であり、全国でも稀な砂河川でもある。これには斐伊川流域で近世に盛行した「たたら製鉄」が背景にある。特に製鉄の原料としての砂鉄を「鉄穴流し」という手法で採取したことが影響している。「鉄穴流し」とは風化がすすんだ花崗岩などを山地斜面から掘り崩し、水路に流し込み、流水の力で砂鉄粒を選別採取する比重選鉱のことである。砂鉄の含有率があまり高くないため、不純物としての土砂が大量に排出された。最終的には土砂の多くは、斐伊川を通じて下流に運ばれ、斐伊川中流の氾濫原あるいは宍道湖岸の出雲平野に堆積することになる。近世に堤防や護岸によって河道が固定化されるようになると、河道内にも大量の土砂が埋積し、周辺の氾濫原より河道が高くなり天井川化が進んでいく。天井川となっているのは出雲市の上島町あたりから島村橋付近まで、約十数kmにわたる。 河道と平野との高度差が最も大きいのは、斐伊川が大きく東へ屈曲する出雲市武志町周辺で、水田との高度差は、斐伊川河川敷から3m、河床からでも2mも低くなっている。天井川の河道は粗い砂で埋め尽くされ、流水の大部分は伏流水となっているため、表面を流れる水量は乏しく、渇水期にはしばしば河床が干上がってしまう。そのため、斐伊川から取水する用水路の取水口まで本流の縁には「鯉の尾」と呼ばれる導水路が築かれる。これは河床内の土砂を土手状に盛り上げて取水口までつなげ、河水を誘導するものである。 自然状態では河川自身が新たな流路を求めて河道を変更し続けるため、天井川となることは稀といわれている。したがって、天井川は河道の固定、すなわち堤防で水路が囲いこまれてしまうことが一番の原因といわれ、極めて人為的な地形といえる。 斐伊川は古くから氾濫を繰り返してきた。江戸時代に入ると様々な治水対策が行われるようになった。特に重要なのは、人為的な河道の付け替えや分流通削で、このような流路変更は「川違え(かわたがえ)」と呼ばれ、治水だけではなく、宍道湖の埋立、新田開発を促進するという役割も含んでいた。こうした新田開発によって江戸時代以降、湖岸線が約5km前進している。以下のような川違えが行われた。 ①平田の川違え:1687(貞享4)～1723(享保8) ②島村の川違え:1723(享保8)～1785(天明5) ③三分市の川違え:1785(天明5)～1836(天保7) ④坂田枝川の開削:1809(文化6)～1872(明治5) ⑤新川の開削:1832(天保3)～1938(昭和13) ⑥島村定川:1840(天保11)～[ほぼ現在の流路] こうした新田開発によって江戸時代以降、湖岸線が約5km前進している。				
	地質・地形					
	歴史・文化 生物・生態 等	『出雲国風土記』には出雲大川と呼ばれ西の「神門の水海」に注いでいたとされる。アユやサケが遡上し、春先には材木が流されると記述されていることから、古代の斐伊川は天井川ではなかったようである。				
写真・図等		 				
参考文献		鹿野和彦ほか(1989)大社地域の地質				